

プレゼンテーションⅡ「待降節と降誕節—主の降誕と新年の祝い」

市瀬英昭

「顕現の季節」は「過越の季節」と共に典礼暦年の二大サイクルをなしており、後者を「いのちのサイクル」とすれば、前者は「光のサイクル」である。

1. 待降節

- ①待降節は二重の特質をもっている。第一の主の来臨（受肉）の追憶と第二の来臨（終末時）の待望。この理由で、待降節は愛と喜びに包まれた待望のときとなる。典礼色は紫。アレリヤ唱は歌うが、栄光の賛歌は控える。
- ②待降節には4つの主日がある。テーマは、それぞれ「目覚めて待つ」「主の道を整える」「主は近い、喜べ」「みことばは人となった」であり、各主日にふさわしい聖書朗読の箇所が選ばれている。旧約聖書は主にイザヤ書から。
- ③このうち、12月17日から24日にいたる週日は、いっそう直接に主の降誕の準備に向けられている。ミサの朗読箇所や公式祈願、叙唱などの他、『教会の祈り』（晩の祈り）で歌われる「おお、アンティフォン」が特徴的である。
- ④典礼秘跡省指針『民間信心と典礼』（2001年）は、晩の祈りを信者と共に祝うことの他、クリップ、待降節の輪とローソクなどの準備を子どもたちと共にすることを勧めている。こうして徐々に救いの光が近づいていることが実感される。また救いを「待望」することの大事さが述べられている。
- ⑤待降節は「すでに来られた救い主を待つ」季節。「あいだ」を生きるキリスト者の生き方、典礼と秘跡、旧約新約の救いの一貫性についても学ぶ季節。

2. 降誕節

- ①降誕節は、主の降誕の「前晩の祈り」から始まり、主の公現後、すなわち1月6日直後の主日まで続く。この季節の典礼色は白。栄光の賛歌は歌う。
- ②降誕祭（クリスマス）の起源はローマ。宗教史的仮説をとれば「対抗祭」。
- ③降誕祭には、ローマ古来の伝統に従って3つのミサを捧げることができる。この歴史的に発展したミサに中世の神秘家は、御父からの御子の誕生、マリアから神の子の誕生、聖霊によるキリストの信者の心への誕生、を見ている。
- ④主の降誕は固有の8日間を持っている。聖家族、ステファノ殉教者、使徒ヨハネ、幼子殉教者。8日目の1月1日は神の母聖マリアの祭日であり、同日、イエスの命名も合わせて祝う。現在は「世界平和の日」。ステファノ、使徒ヨハネは8日間成立以前から存在していた祝日。神の母聖マリアも「対抗祭」。
- ⑤主の公現（エピファニア）の起源はアレキサンドリア（東方）。
- ⑥公現祭節は、主の公現から公現祭直後の主日「主の洗礼」まで続く。主の公現、顕現は内容的には主の全生涯に及ぶものであるが、この期間にはその初期の出来事（三博士来訪、ヨルダンでの洗礼、カナの奇跡）が祝われる。
- ⑦指針『民間信心と典礼』では、公現日に「家の祝福」が、主の洗礼日に「アスペルジス」が勧められている。主の洗礼で降誕節が終わり、「年間」が開始される。
- ⑧降誕節は「すでに来られた救い主を喜び迎える」季節。典礼的「きょう」によって、すでに来られた方を「ここに・いま」迎える。